

現代中国の書家二十人を紹介する不定期連載

中国当代書家二十人

第2回

取材・文／郭同慶

沈鵬

沈鵬

しん・ほう

一九三一年、江蘇省江陰市生まれ。書法家、詩人、美術評論家。中国人民美術出版社編集長を経て、現在、顧問。中国書法家協会主席を経て、現在、名誉主席、中国国家画院書法篆刻院院長、中華詩詞学会名誉会長、中国政治協商会議委員、中央文史館館員、中国文化藝術界聯合会榮譽委員などを兼ねる。詩詞集として『三餘吟草』『三餘統吟』『三餘再吟』『三餘箋韻』、美術評論集として『沈鵬書画談』『沈鵬書画統談』『書法本体と多元化』、書道作品集として『当代書法精品集・沈鵬卷』『沈鵬書法作品集』『沈鵬書古詩十九首長卷集』『沈鵬書白居易長恨歌・琵琶行』『沈鵬楷書千字文』『沈鵬草書千字文』など、著書多数

中国書法家協会終身名誉主席であり、また詩人として、美術評論家としても名高い沈鵬氏。中国書道家代表団を率いて訪日回数も多く、日本の書家との交流も深い。この度、中国書法家協会主席・蘇士澍氏とともに、郭同慶氏が北京に住む沈鵬氏の書齋を訪問。長年にわたり中国書壇に君臨する大家を取材した。

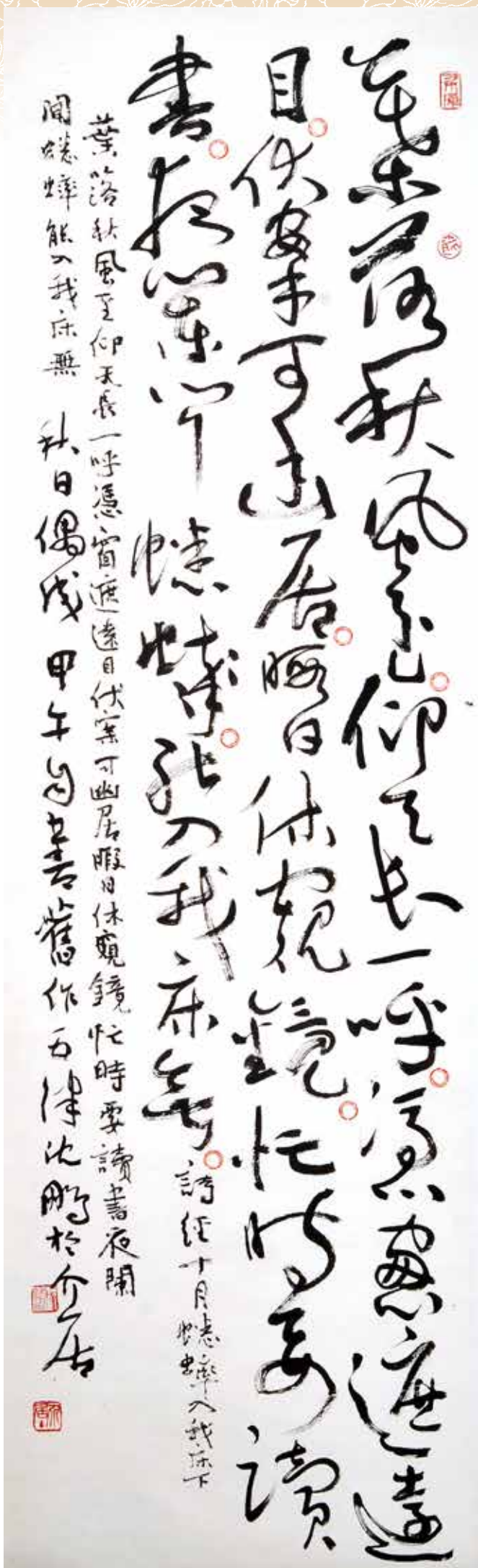
(編集部)

不問前胸後背身
 已難哄聚比輪困
 能敵老牌花露水
 秋風逐日吹淒厲
 任他瘦骨與肥臀
 少息時機叮寡人
 却遭新產滅瘟神
 捱進南窗候夜昏

沈從文
 甲午年秋蚊



不問前胸後背身
 已難哄聚比輪困
 能敵老牌花露水
 秋風逐日吹淒厲
 任他瘦骨與肥臀
 少息時機叮寡人
 却遭新產滅瘟神
 捱進南窗候夜昏



葉落秋風至 仰天長一呼 憑窗遮遠目 伏案可幽居 暇日休窺鏡 忙時要讀書 夜闌聞蟋蟀 能入我床無

*《詩經》(國風・邶風・七月)に「七月在野、八月在宇、九月在戶、十月蟋蟀入我床下」の句がある。

詩人・文人・書法大家 沈鵬

中国書壇に君臨

さる二〇一七年十二月三十日、当代著名な書法家、美術評論家、詩人・沈鵬先生の個人名で命名された「沈鵬詩書画賞」の授賞式典が、中華詩詞学会の主催により中国国立図書館で開催された。沈鵬先生は、「詩書画」オーラウン下の創造的な才能を持つ若手アーティストの育成及び奨励のため、多額な寄付を行った。中華詩詞学会はこれを基に総合的な芸術賞である「沈鵬詩書画賞」

を新設した。受賞式典に関する報道により、詩壇・書壇・画壇、及び文芸界全般に大きな反響を呼んでいる。

沈鵬先生は長年に亘り、中国書法家協会主席として中国書壇に君臨し、中国書法家代表団を率いて何度も訪日して、様々な団体や書道家との交流で、日本でも知名度が高い。しかし、詩人や美術評論の権威であることはあまり知られていない。筆者は先頃、現職の中国書法家協会主席・蘇士澍氏とともに北京にある沈鵬先生の書齋を訪問し、先生の書道人生や書道と文学及び詩文の内在的な関係を探ねた。

文筆の天才少年——詩書画の薫陶

沈鵬先生は、一九三一年に江蘇省江陰市(当時は江陰県)に生まれた。江陰市と言えば、古来、江南文化の重要な発祥の地である。南は無錫市と繋がり、北は揚子江を臨む。沈鵬先生は旧制教職の家庭で生まれた。父の兩祥氏は高校の国語を教え、母親は地元名門豪族の出身で高い教養の持ち主だった。沈鵬先生が通った城南小学校は、祖父の寄付によって設立された。しかし、生れつき病弱だった沈鵬先生は、母親の実家で療養していた際、間違った薬を飲まされ、身体にかなりの打撃を受け、今でもその後遺症に苦しまれているそうだ。生活面で優しく世話する母親だったが、躰は極端に厳しい。どんな良い成績表を持ち帰っても、母は一度も褒

一夢由來最愧傷
欲題四字索枯腸
人情練達通關節
世事悲歡急就章
好了歌如何好了
荒唐詩益轉荒唐
奇書哪得千回讀
磨墨人磨夜混茫

1996年11月

一夢由來最愧傷
欲題四字索枯腸
人情練達通關節
世事悲歡急就章
好了歌如何好了
荒唐詩益轉荒唐
奇書哪得千回讀
磨墨人磨夜混茫

行書自詠詩《紅樓夢館》促題匾額

めたことがなかった。逆に「傲ってはいけませんよ、社会に役立つ文化人になるなら、もっと進んで勉強しなさい」と忠告した。母親の仕込みで中学校での成績は目立つほど良かった。一九四〇年代の現状を踏まえ、「農業国の我が国は工業化を実現せよ」というタイトルの作文で、全県学生作文コンクール銀賞を受賞し、英語スピーチコンテストでは全県二位を獲得。また、文学愛好者仲間と「曙光文芸社」を結成し、「曙光」という会報を発行。沈鵬先生は編集長に推戴され、自ら二十数篇の散文を発表したほど、文筆の天才少年だった。

教育熱心な母親は、私塾にも通わせてくれた。そこで、沈鵬先生は詩書画に触れ合う機会に恵まれた。まずは当初、江陰県内で唯一の挙人（厳格な郷試に合格した方）であり、詩人である章松庵に詩詞の基礎を教わった。後に、沈鵬が著名な詩人になった原点はここにあると言われている。次は地元の国学者・姚燮に出会い、「文語文解説」や「文字学解説」などを丁寧に教えて貰い、それらの学問をしっかりと身につけることができ

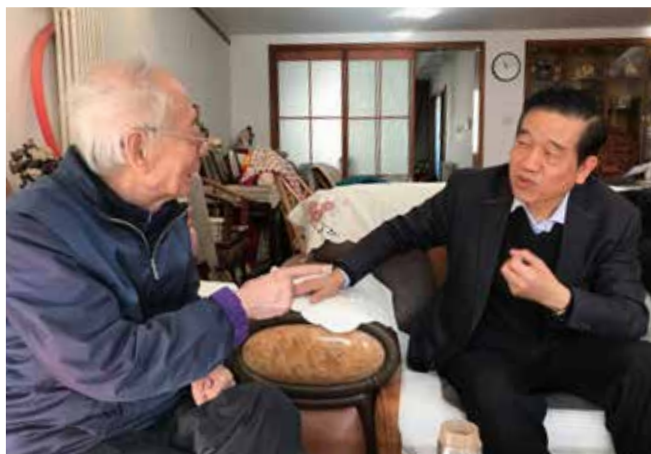
た。文語文の作文は相当の量をこなした中で、今でも大体覚えているのは「西瓜」という作文。先生はご褒美として「篆書の扇面」をくれた。今でも家宝として収蔵されている。しかし、学問の大先生にも誤認はある。例えば、塾でお腹が痛くなった沈鵬先生に対して、姚先生は「これ（大煙）阿片の一種」を吸えば直ぐに治ると勧めた。少年沈鵬は半信半疑でありながら、言われた通りに必死に吸い込んでみたが、ちっとも良くならない。「君の吸い方が悪いのだ」と叱られたその言葉は、今でも耳に残っているようだ。

母は絵画の塾にも行かせてくれた。先生は地元山水画の大家・曹竹筠翁だ。曹先生は山水画の頂点は宋元であるという観点を持ち、元四家（黄公望、王蒙、倪瓚、呉鎮）を順序に解説し、模写の方法を実演してくれた。特に倪瓚「折带皴」や《芥子画譜》の宿題が多かった。沈鵬は教本で学んだ技法をもって、町の小橋流水、いわば「江南風景」を常にスケッチした。ある日、曹先生がそれを見て、「わしがまだ教えてない「余白」の処

隸書自詠詩《題破山寺後禪院》詩

清晨入古寺
初日照高林
曲徑通幽處
禪房花木深
山光悅鳥性
潭影空人心
萬籟此俱寂
惟聞鐘磬音

清晨入古寺
初日照高林
曲徑通幽處
禪房花木深
山光悅鳥性
潭影空人心
萬籟此俱寂
惟聞鐘磬音



沈鵬氏（左）と談笑する中国書法家協会主席の蘇士澍氏（右）

十里洋場
夜未央
樓船未往
織枳忙
驕陽消息
尋何處
散入吳淞
七彩

沈鵬

沈鵬
沈鵬

2005年夏

理が非常に周到であり、実に驚いた」と感嘆した。曹先生は余白に適切な工夫は中国書画の最も重要なポイントであるとの見解を示して、沈鵬先生の生れつきの「虚実感覚」を高く評価し、この「天賦」をもって将来に大いに期待ができると断言した。

中国にある「三歳は八分の決まり」の諺のように、幼い頃の仕込みがいかに大事なことであるか、母が一番分かっていたと、沈鵬先生は今でも感謝している。

文学青年が国家の書画出版に携わる

一九四八年、十七歳の沈鵬先生は、優れた点数で国立中正大学（現在は江西師範大学）の文学部に入学。在学中、文学及び英文学を得意とする沈鵬先生は、英語小説の翻訳にも力を入れ、中国語訳で「窮餓臨門」という小説の翻訳出版まで手掛けた。また、散文、論文も多数発表。

翌年の一九四九年十月一日に新中国が誕生。あらゆる分野で人材の需要が高くなった。文学分野で頭角を現し始めた沈鵬先生にチャンスが巡ってきた。

文学で四年大学卒業のレベル試験を合格した沈鵬先生は、上海。新華社が主催する「媒体幹部訓練班」に入った。半年の媒体関連特訓を受け、すぐに《人民画報》社に配属され、いきなり資料室の責任者との辞令を受けた。二年後にその高い能力が評価され、上部組織・国家出版総局人事部より、人民美術出版社の編集長の室長に抜擢された。書画が大好きな沈鵬先生は、「如魚得水」（魚の水を得たるが如し）で喜んで仕事を全うした。

室長の主な業務は、編集長の代わりに行う各部室に提出された様々な原稿の校正である。最初の頃は、沈鵬先生が代役でチェックした原稿を編集長が再確認していた。そのうち、編集長はこの文学青年の能力を高



沈鵬氏（右）と取材中の郭同慶氏（左）

く評価し、校正は完全に任せた。噂を聞いた各部室長は不満と不安を抱えた。しかし、沈鵬先生の校正した原稿を確認するうちに、全員が感心し、敬服してくれたという。

文学青年・沈鵬のもう一つの役目は、社長や編集長の代筆だ。重要な評論文や大型出版物の序文並びに社内の提案書、また期末報告書などは長い間、代筆した。五〇年代は中国が全般的に復興期になる。いわば「百廢待舉」である。沈鵬先生は出版社の様々な制度の整備を手がけ、特に難問といわれた「原稿料制度」をまとめたのだ。また、九〇年代までの数十年間の間に、「人民美術出版社五カ年計画」や「十カ年計画」を立案した。今回の取材時に同席した蘇士澍氏は「沈鵬先生は美術出版社を支えた裏の役立者で、貢献度が極めて高い」とコメントする。

沈鵬先生は一九五一年に人民美術出版社に入社して以来、社長秘書室長、編集長室長、副編集長、編集長

草書自詠詩《中秋夜獨歩》

▶十里洋場夜未央 慶船來往織梳忙
驕陽消息尋何處 散入吳淞七彩光
*款記で「梳」を「梭」と訂正している。



今歲中秋夜 月兒十七圓 天時有如此 人事或茫然
雲翳羞花貌 氣清托玉盤 行行街似水 涼意照嬋娟

2017年10月

を歴任し、現在は顧問である。その間に、『中国書画』、『美術の友』、『美術手引き』等、書画雑誌を創刊・編集し、また、編集責任者として様々な国家出版プロジェクトに携わり、『中国古代絵画・故宮博物院所蔵画集』(全八巻)、『中国古代美術全集』、『中国芸術』、『中国書法全集・書法篆刻篇・宋元金書法巻』、『中国書法名帖精華叢書・草書巻』、『大型グラフ・北京』、『大型グラフ・ソ連』などを担当した。『中国古代絵画・故宮博物院所蔵画集』(全八巻)は、一九九三年に中国「国家図書賞」を受賞。それらの刊行に関する序文や美術評論などの文章は国内外で高く評価され、二〇〇八年に「卓有成就な美術史論家」と中国美術家協会に表彰された。

最も著名な詩人・文人・書家大家

沈鵬の書家として業績は、特に素晴らしい。個展や各種交流展並びに書道講演会のため、米国、フランス、日本など一〇カ国以上の国及び地域を訪問した。国内では、峨眉山、長江三峡など、懸崖や各地の名所旧跡に題字が刻まれている。また作品は、国内はもちろん、欧州、米州、アジア多数の美術館に収蔵されている。一九八七年の早春に読売新聞社と人民日報社の共同開催により、日中国の書家代表が一堂に蘭亭に集まり、東晋時代に王羲之が主催した「蘭亭雅集」を再現した際に、青山杉雨氏や村上三島氏らトップクラスの方々が大型訪中団を組み、参加した。中国の啓功氏や沙孟海氏らも出席し、曲水流觴の宴で、沈鵬先生は、隣席の杉岡華邨氏、殿村藍田氏ら

と詩書の交流を交した。

三十歳前は、文学に夢中だった。沈鵬先生は、「而立」後に書道書籍の編集を繰り返され、徐々に書道への情熱が再燃したようだ。人に対する環境の影響は大きい。仕事で『中国書法全集』や『中国書法名帖精華叢書』などの歴代書法名品に深く沈潜しながら、週末は集中的に臨書に励んだ。歐陽詢の『皇甫君碑』、『九成宮醴泉銘』を勉強し直した。行書は米芾の諸帖、隸書は『曹全碑』、『史晨碑』、『張遷碑』、『石門頌』、『石門銘』及び木簡竹簡各種を広く臨書した。草書は最初に王鐸の諸帖を取り込み、後に傅山が面白いと思ひ、傅山に切り替えた。王鐸より傅山に研究の精力を多く注いだので、傅山の真髄を得ることができた。章草は、鄧文元の『臨急就草巻』、『千字文』を好んだ。美術評論家としても名高い沈鵬先生は、勉強方法に関しても優れた見識を持っている。即ち、一書家一書体に束縛されずに広く勉強する上で、諸家諸書体の長所を吸収し、自分のものに溶解した上で自己の「顔」を作り上げて行くという理念だ。

沈鵬先生は特に草書を愛し、独自の草書風韻の形成



2006年3月の訪日の際、席上揮毫する沈鵬氏

は、偶然ではなかったようだ。幼い頃に草書の魅力を感じて、草書の大家に対する特別な敬意を持っていて、小学校の時代に興味のない科目はほとんど聞かずに、隠れて絵を画いたり、書を書いたりした。少年沈鵬は岳飛の草書作《還我河山》の出版物を持ち込んで、鉛筆で何度も模写した。その線の千変万化に魅了されたのだ。青少年の時代には、限られた草書名帖しか入手ができなかった。しかし、編集出版業務に携わりながら、

草書に対する思考が日々深まっていく。長年に亘り編集責任者として歴代書法家並びにその代表作の選択、分析、討論、批評などの作業を行う過程で、次第に自己の見識が充実していったのだ。草書に対する自己目標も自然に定め、独自の書風も出来上がった背景はそこにある。

当代中国書壇の大御所・沈鵬先生に草書学習や創作に関する貴重な経験を伺ったので、以下の四つにまと

めみた。

その一、臨書方法。臨書は当然ながら重要な学習過程であるが、草書の場合、臨書だけでは気韻を得難い。最も重要視しなければならないのは「意会」である。即ち、手本の作者の意図、そしてそれに派生する字勢や筆意をいかに解読ができるかということである。

その二、個性重視。草書はその崩し方の規律に従うことは賛成するが、ただし一種の「標準」に束縛されて

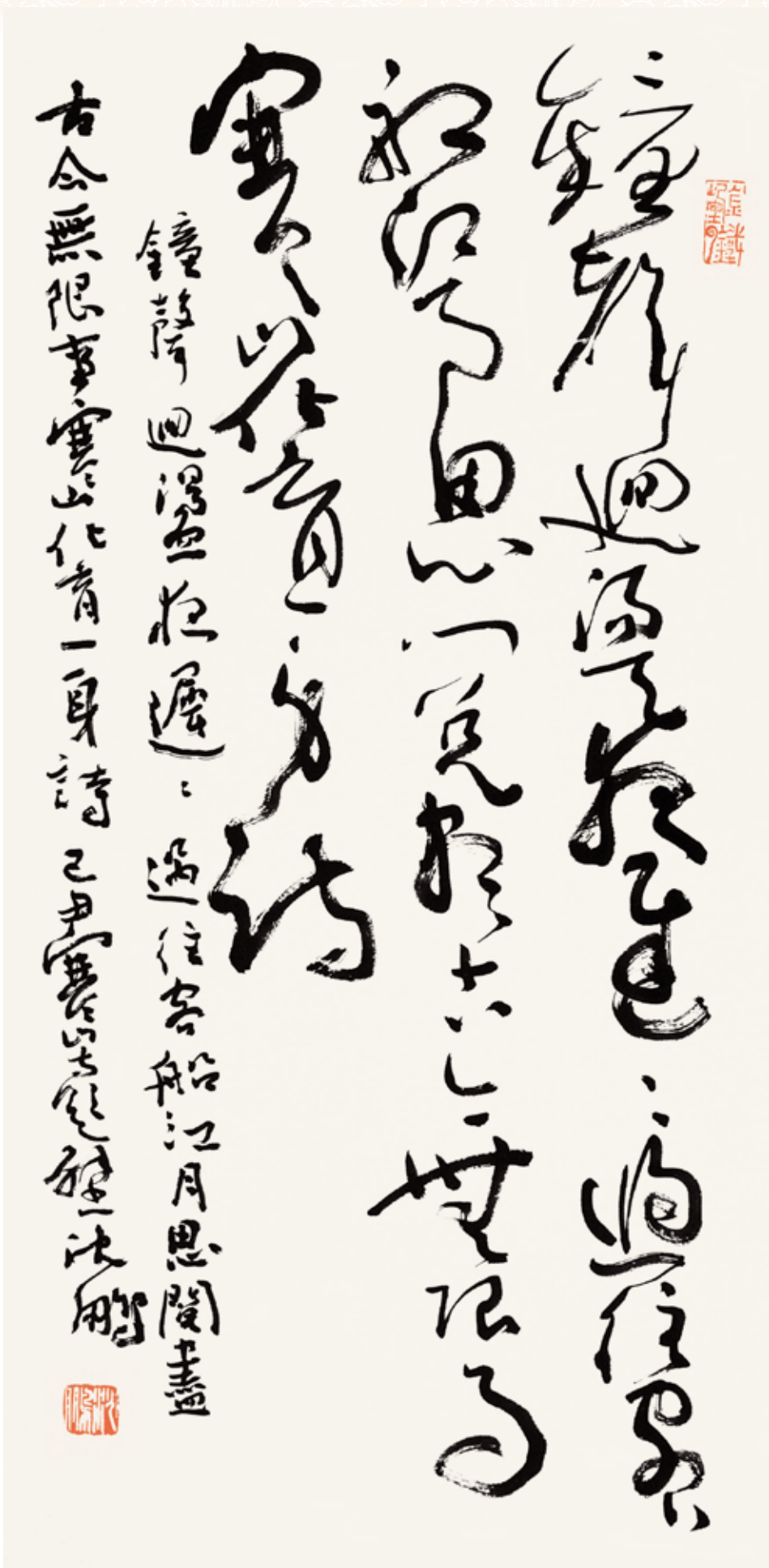
草書自詠詩《沁園春・吳哥石窟》

忠節義氣、
 孤在荒僻、
 同國師、
 衆侶、
 方以物移、
 龐貝、
 文畫、

沁園春 吳哥石窟
 辛卯元日 沈鵬於上海

2010年10月

草書自詠詩《寒山寺題壁》



▶熱帶叢林 一馬平川 古窟列張 望靈岩雕琢 崔嵬佛閣 蒼穹變幻
駭蝕華堂 斧鉞天開 國師謀略 牛鬼蛇神到此狂乘豪興 有同來眾侶
慷慨宮商 千年風雨無常 念往昔 干戈動八方 縱物移星換 土埋陳跡
時來運轉 壁合重光 龐貝墻垣 泰姬陵墓 萬里長城一帝王 文明史
盡蒼生汗血 睿智流芳

鐘聲迴蕩夜遲遲 過往客船江月思 閱盡古今無限事 寒山化育一身詩



自詠詩を揮毫した書を見つめる沈鵬氏

はならない。いかに個性を発揮するかは最も大事だ。その三、運筆速度。一般論でいうと、草書の運筆速度は楷書・行書より速く、筆法の動きに変化が多い。しかし沈鵬先生は、衛恒や懷素の書論に基づき、ゆったりとした遅い運筆方法を推奨する。その四、氣勢雄大。書画は精神を定め、気概を足ると事は言う。草書の氣勢はまず内蔵し、そして肩、腕、手、筆、筆先の順で、紙背まで至る。即ち蘇東坡のいうように、「筆至らず前に、氣は既に呑んでいる」。

総合的には、「胸有成竹」の熟語の通りに臨場し、左右の呼応、上下の配慮などの臨機応変な取り込み姿勢が大事という。また、出来上がった作品は「遠観」「近察」のどちらにも堪えるものになければならない。

沈鵬先生の経験談は非常に貴重なアドバイスである。ちなみに、先生の書論などの著書は、身の丈にあま

草書・自詠畫贊詩・酬吳為山君為余画《斥筆圖》

斥筆圖
 名山君為余造像 深得東坡傳神記之三昧 所謂眾中陰察之 蕭然有意於筆墨之外者也 得五言絕句誌感



2015年5月

名山君為余造像 深得東坡傳神記之三昧 所謂眾中陰察之 蕭然有意於筆墨之外者也 得五言絕句誌感

斥筆龍蛇走 衝冠鬢髮邪 蒼茫惟獨立 曠達致無涯

名誉主席の回顧

沈鵬先生は、長きに亘り、中国書法家協会や全国政治協商会議の重要な職務に就いていた。

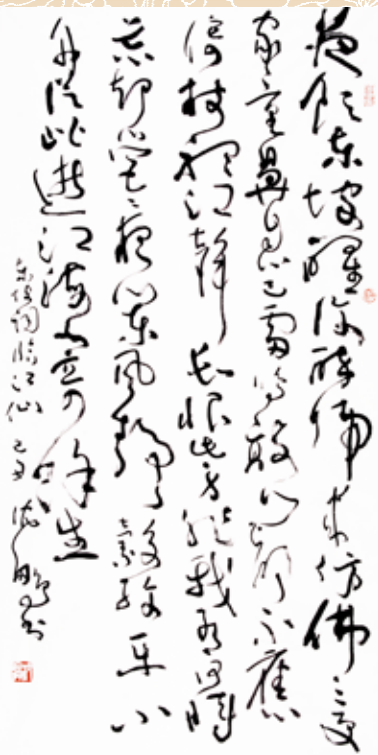
中国書法家協会の前身である「北京書学研究会」は、文化大革命が終止符を打ったその年（一九七六年）に設立。大物の趙朴初氏は会長で、沈鵬先生は秘書長に推戴され、研究会の業務を担当した。実際の中心メンバーは謝德萍氏などであり、蘇士澍氏は最も若く一番熱心に研究活動に参加した。五年目（一九八一年）、中国書法家協会が出来て、全員は書協（中国書法家協会）に入り、中堅勢力として書協を支えた。

一九八一年五月、人民大会堂で中国書法家協会の設立総会が召集され、第一回中国書法家協会理事会にて、舒同氏は主席、趙朴初氏は副主席、沈鵬先生は十九名の常務理事の一人に推薦された。一九八五年、第二回中国書法家協会理事会で啓功氏は主席、沈鵬先生は副主席に選れた。一九九〇年十二月、中国書法家協会理事会で邵宇氏が主席、沈鵬先生は筆頭副主席に選れて、翌年に邵宇

るほど多い。一九八〇年代に《書画論評》、九〇年代に《沈鵬書画談》、二〇一〇年に《沈鵬書画統談》（上下）など四十万字を超える美術評論著書を発表し、作品集として《当代書法精品集・沈鵬卷》《沈鵬書法作品集》《沈鵬書古詩十九首長卷集》《沈鵬書白居易長恨歌・琵琶行》《沈鵬楷書千字文》《沈鵬草書千字文》《当代書法精品集・沈鵬卷》《沈鵬書法作品集》《沈鵬書古詩十九首長卷集》《沈鵬書白居易長恨歌・琵琶行》《沈鵬楷書千字文》《沈鵬草書千字文》、また、糸綴じ装丁本《沈鵬書自作詩詞百首》など、数十種類の作品集が発刊された。一一九五年に最初の詩集《三餘吟草》が出版され、その後に、《三餘統吟》《三餘再吟》《三餘箋韻》などの詩集を世に問う。これだけの人物は中国書壇では極めて稀であり、文字通り沈鵬先生は、詩人・文人・書法大家である。

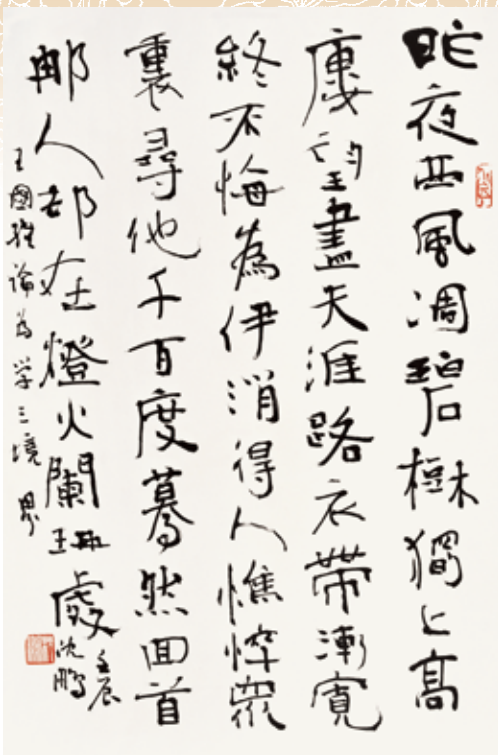
中国では、人民大会堂において揮毫することは最も高い名誉とされている。一九九二年に政府の担当部門による依頼で、《毛沢東主席詞・沁園春・雪》の巨大な作品を寄贈。人民大会堂で今でも堂々と輝いている。

草書蘇東坡詞《臨江仙》



の病死により、沈鵬先生は八年に亘り主席を代役した。二〇〇〇年十二月、第四回中国書法家協会理事會が開かれ、沈鵬先生は正式に主席に選出された。二〇〇五年、名誉主席になり今日に至る。中国では沈鵬先生は徳が

行書《王國維論為學三境界》



昨夜西風凋碧樹 獨上高樓 望盡天涯路 衣帶漸寬終不悔 為伊消得人憔悴 衆裏尋他千百度 驀然回首 那人却在燈火闌珊處

夜飲東坡醒復醉 歸來彷彿三更 家童鼻息已雷鳴 敲門都不應 倚杖聽江聲 長恨此身非我有 何時忘卻營營

夜闌風靜穀紋平 小舟從此逝 江海寄餘生

高く声望がある人間国宝のような存在である。

沈鵬先生は一九九二年に主席代理に、二〇〇〇年に主席となり、実質的に中国書法家協会に十三年間、君臨してきた。氏は詩人であり、文人である。または、書家であり、数万人が集う書協の大組織のトップであった。就任後、トップとしては独自の運営理念とともに、広大な度量を示した。

まずは「書法は持続的発展が可能である」との理念を発表。「急功近利」（利益や成功に目がくらむ傾向）を一掃し、長期的な計画を持って、書法文化芸術を重んじる社会を生み出すための行事を推進した。小中高及び大学の書法教育の充実、また校外教育及び社会教育における書法普及活動の、協会としてのバックアップの強化など、具体的に指導した。また各種研究や交流の団体結成の促進し、自由な独自の研究活動をサポートして、良好な学術的雰囲気を作った。

第二、「包容」を強調し、多元化を提唱した。「包容」はイコール「団結」ではないが、「包容」すれば「団結」に到達すると提唱。協会の内部で様々な意見が出ることを正常状況と認め、学術的に意見を述べ合う機会を提供し、分派行為を防いだ。

第三、「原創」（オリジナル創作）を提唱。中国国家画院書法院長を兼務した際に、十六文字の経営理念「弘揚原創、尊重個性、書内書外、芸道並進」を発表。歴史に残る書家は個性があり、例えば、唐の「歐（陽詢）・褚（遂良）・顔（真卿）・柳（公権）」や宋の「蘇（東坡）・黄（庭堅）・米（南宮）・蔡（襄）」は、みな個性を鮮明にしている。他人にない要素を持つ事は、最も重要な研究課題だと、檄を飛ばした。また、「書内書外、芸道並進」の提唱により、若い書法家達の間には、史書や詩詞の教養を重視する風潮が出来た。小文の始まりにおいて「沈鵬詩書画賞」の創設に触れたが、それは沈鵬先生が苦心惨澹し、心血を注

いだ結果であり、近年、オールラウンドな書法人材が「雨過春筍」のように輩出した。

そして沈鵬先生は「身を以てて範を示し」、読書はもちろん、詩詞の創作は発表作だけでも一〇〇〇首を遙かに超えた。中国詩詞学術の権威である「中華詩詞学会」はそれらを高く評価し、同学会名誉会長として沈鵬先生を招聘した。沈鵬先生の詩には「読書每責貪床晏、閱世未嫌聞道遲」という句があり、上句は身体が病弱なので毎朝が起床は遅い、下句は孔子の「朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり」（《論語》里仁第四、八）の教えによるもの。この詩句の中から沈鵬先生の生活習慣や価値観を読み取ることができるのではないだろうか。また、このようなユーモアな句がある。「暇日休窺鏡、忙時要讀書」（暇日の休みに鏡を窺い、忙しい時に読書を要る）。

持続発展、包容団結、個性強化を明白に打ち出した指導方針のもとで、九〇年代後半以来、中国の書壇は激しい変革の旋風が巻き起こり、個性溢れる各書体の力作が火山のマグマのように噴出、中国書法界に大繁栄の新しい時代が到来したといっても過言ではない。沈鵬先生の賢明な、長期に亘る協会運営の成果として、そのことは書法史に刻まれるに違いない。



郭同慶 かく・とんけい 書家、日本名山田慶太郎。一九五七年、上海生まれ。一九八七年に來日。王羲之、銭君匋、蕭春海に師事。二〇一四年度で上海（朵雲軒）、東京、京都、前橋で個展を開催。上海書画出版社で《墨海一粟》作品集を出版。翰墨書道会長、東京藝術院長、東京海派書画院常務副院長、全日本華人書法家協会副主席兼秘書長、豊道春海頭影之顧問、（公社）日中友好協会参事、群馬県日中友好協会理事、上海呉昌碩藝術研究協会理事、上海復旦大学王羲之研究會常務理事、上海（玉佛禅寺）梵群書画院画師などを兼ねる。